



【OS】高齢者の生活・医療を支える VR

[Organized session] VR Supporting the Lives and Healthcare of the Elderly

主催：超高齢社会の VR 活用研究委員会

SIGVRAS: Special Interest Group on Virtual Reality for an Age-friendly Society

9/11(Wed) 14:30 - 15:50

概要：急激な少子高齢化の進行に伴い、高齢者の支援は喫緊の課題となっている。本学会の「超高齢社会の VR 活用研究委員会」は、高齢者の生活の質を向上させる VR 技術の開拓と普及を目指して活動している。今回のオーガナイズドセッション「高齢者の生活・医療を支える VR」では、移動支援、遠隔ヘルスケア、地域看護教育に関する講演を通じて、高齢者の生活や医療における VR 技術の可能性を議論する。

キーワード：高齢者、移動支援、遠隔ヘルスケア、看護教育、支援技術

講演者（敬称略）

- 橋本尚久（産業技術総合研究所）地域移動弱者を支えるための自動運転を含んだモビリティサービスにおける VR への課題と期待
- 蔵田武志（産業技術総合研究所）遠隔ヘルスケアのための多感覚 XR-AI 技術基盤 ～リハビリ・特定保健指導から人的資本経営支援まで～
- 吉岡京子（東京大学）高齢者の「家での暮らし」を支える看護学生向け VR 教材の開発
進行：上田一貴（東京大学）

講演趣旨

国内外において急激な少子高齢化が進行しており、その対策が喫緊の課題となっている。高齢者の支援においては、心身のヘルスケアのようなフレイル化・虚弱化対策などの医療・介護関連分野での研究開発がますます必要とされている。一方で、現在の高齢者の多くは元気高齢者（要支援・要介護認定されていない高齢者）であり、彼らの自立した生活を維持するための取り組みや、就労やボランティア活動などの社会参加を促す技術開発や制度設計も展開されている。制度面では、高年齢者雇用安定法が 2013 年、2021 年に改正され、実質的な定年年齢がそれぞれ 65 歳、70 歳へと引き上げられた。多くの元気高齢者は高い社会貢献意識を持ち、若年者にはない知識・経験・技能を持っている。しかし、元気高齢者が活躍する現場はまだ開拓途上であり、社会保障や制度のみならず、技術を介した様々な支援も必要とされている。

本学会では、このような状況を鑑みて 2014 年に「超高齢社会の VR 活用研究委員会」が発足した。本委員会は、高齢者の QOL の向上に資する VR 技術や、世代を超えて生きがいや楽しみを共有できる VR 技術を開拓し、普及させることを目的に活動してきた。その一環として、VR 学会大会にてこれまでに 9 回のオーガナイズドセッションを実施してきた。2014 年は情報技術と文化の融合調査研究委員会と合同で「VR 学における暗黙知伝承」を開催した。引き続き 2015 年「高齢社会に活かす VR へ向けて」、2016 年「アクティブシニアに繋がる VR を考える」、2017 年「老後の日常を豊かにする VR 活用」、2018 年「コグニティブエイジングのための VR を考える」などを開催し、高齢者ならではの VR 活用に関して活発な議論を行ってきた。また、近年では 2023 年の「高齢者×メタパース×ELSI」のテーマのような、高齢者問題も含めたさまざまな社会課題に対応すべく VR を活用した支援技術の利用法についての議論も行える状況になっている。

今回のオーガナイズドセッションでは「高齢者の生活・医療を支える VR」と題して、高齢者の生活場面や医療場面における VR 技術を活用した支援方法の可能性について議論することとした。まず、橋本先生に、高齢者に関わる重要な社会課題の一つである移動支援の取り組みについてご講演いただく。次に、蔵田先生に、多感覚 XR と AI の連携技術による遠隔ヘルスケアについてのご講演をいただく。さらに、吉岡先生に、地域看護に関わる看護教育の VR 技術の活用についてのご講演をいただく。以上の講演内容を基に、高齢者の生活・医療に資する VR 技術について議論を深めたい。